

| | |
|--------------|---|
| Title | 特殊な”S+V+0”構文における目的語およびその修飾語の機能について |
| Author(s) | 河上, 誓作 |
| Citation | Osaka Literary Review. 6 P.50-P.72 |
| Issue Date | 1967-06-05 |
| Text Version | publisher |
| URL | https://doi.org/10.18910/25827 |
| DOI | 10.18910/25827 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

特殊な“S+V+O”構文における 目的語およびその修飾語の機能について

河 上 誓 作

We had a good time on the hill. —(1)

We had a good house on the hill. —(2)

これらの文章は、外見上何ら違いはないかに見える。しかし、(2)では、good がなくても文章が成立するのに対し、(1)では、good がなければ成立しない。この差異を明確にし、(1)の文章の特徴を体系づけるのが、小論の具体的なテーマである。

I. 単一動詞の心理構造とその Direct Object との関係

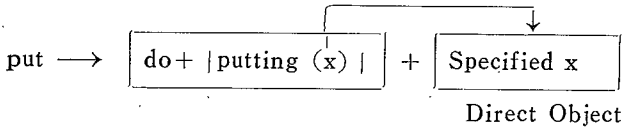
一語で完成した動作概念を表わし得る動詞を「単一動詞」(Single Form Verb)と名づけると、この単一動詞の表わす動作概念がわれわれの心理状態においてどのような構造をなして存在しているかを分析し、便宜上、一種のモデル構造として形式化したものを、単一動詞の「心理構造」(Psychological Structure 略して PS)と名づけるとすれば、例えば、“rise”の心理構造は、次のように表わされ得る。

rise →

| |
|---------------|
| do + rising |
|---------------|

すなわち、最も未分化で漠然とした動作内容を表わす |do|^① という要素と、特殊化された具体的動作の表象を表わす |rising| という要素からなると言える。

さて、rise に代表されるこの種の動詞は、動作主以外の事物と何らの関係もなく成立する動作に対して名づけられた動詞（従来の自動詞）である^②。ところが、例えば put などのように、いつも動作主以外のある物との関係として扱われた動詞（従来の他動詞）においては、心理構造は、|do+ putting (x)| のように、特殊化されていない目的語のクラスを具体的動作内容の中に含んでいて、(x) が特殊化されてはじめてこの動詞は完成された表現となる。この特殊化された要素が、いわゆる直接目的語 Direct Object^③ である。



このように、心理構造は、|do| という漠然とした動詞要素と、具体的な動作内容を伝達する名詞要素（「～すること」という動作の意味単位で、以後 Semanteme と呼び、「もの」の意味単位と区別する）とからなると言えるが、後者は、前者の動詞要素から見れば目的語の関係にあり、又、動詞の内部構造にあるところから、以後 Internal Object (IO)^④ と名づける。又、この IO には、目的語のクラスを含む場合と含まぬ場合とがあり、含む場合には、(x) から特殊化された要素が直接目的語として外部構造に現われる。この特殊化された直接目的語を、以後、External Object (EO) と名づける。

II. 特殊な “S+V+O” 構文——“S+v+OIO” 構文——

この章では、まず一般に “S+V+O” 構文と呼ばれるものは、厳密には、構造の上から二つのレベルがあること、次いで、特殊な “S+V+O” 構文とはどういうものであるかということ、この二点について考察したい。

さて、次の二文の構造は同じだろうか。

I gave him a book. ——(3)

I gave him an answer. ——(4)

まず、(4)の文章は、その意味をほとんど変えることなく、I answered him. と言い換えることができる。すなわち、

give an answer \rightleftharpoons answer = | do+answering |

という類推関係から、(4)の構造は、単一動詞 answer の心理構造が幾分変化して言語構造に現われたものではないかという推論がなりたつ。一方、(3)では、a book は、give の内含する IO の目的語のクラスから特殊化されてできた External Object と解することができるため、(4)とは明らかに異った構造を持つ。

これらのことから、動詞の外部言語形式には、少くとも二つのタイプ、すなわち、「単一動詞形態」と「^④枠構造動詞形態」とがあることが分る。この二つの構造を以後区別するために、(3)の如き単一動詞を含む構文を「“S+V+EO” 構文」、(4)の如き枠構造動詞を含む構文を「“S+v+OIO” 構文(特殊な“S+V+O” 構文)」と呼ぶことにする。ここで OIO とは、外に現われた IO、すなわち、Outer Internal Object のことで、厳密には、相関関係の Terminus としての目的語ではなく具体的動作の表象、乃至は、その variant であり、目的語の姿を借りた枠構造動詞の一部分、言わば、比喩的な目的語である。また、v とは、様々に変化する |do| の variants の総称である。このように、いわゆる “S+V+O” 構文は、動作表現を相関関係の目的語にしたた表現レベルと、一般の「もの」の相関関係を示す表現レベルとの二つのレベルに区別することができる。

さて、このようにして設定された “S+v+OIO” 構文は、具体的にはどのようなものであろうか。次にこの点を考察してみたい。

まず、枠構造動詞の構造は、先にモデル構造として設定した単一動詞の心理構造と一致すると言える。例えば、次の表現などは、この関係を裏づ

ける良い例である。

he tried to *swim*, but could not *do it*. —O. E. D., s. v., *it*. 9.

この文において、do it は明らかに do swimming の意味である。つまりこれは、swim の心理構造が、まず、枠構造動詞の内部言語形式に移行し、次いで、それが do it という外部言語形式の形態をとって現われたものだと言える。^⑧

このように、“S+v+OIO” 構文の原初の形態は、単一動詞の心理構造に求められる。しかし、この心理構造がそのまま言語表現として現われる例は、そう多くはない。理由は、こうした Semanteme の表現だと、できるだけ「もの」の表象として表現しようとする英語の表現傾向に合わないことや、未分化な段階にある do では、動作内容を具体的に方向づける機能を充分果し得ないことなどが考えられる。

I am willing to *do copying*. (Edna Lyall, *A Hardy Horseman*) / I have not *done* much *walking* since I saw you. (Poutsma)

言語表現に現われる場合は、先にあげた give のように、未分化な do に、何らかの基本的動作が加わってできた「基本的動作語」 v_1 ^⑧となって現われる場合が大部分だと言える。同時に、動作の表象である Semanteme の要素も、そのまま表現に現われるのではなくて、「もの」の表現に変化して現われる。これは、本質的には、「～すること」という動作の表現であることに変わりはないのだが、英語の慣用上、できる限り全ての表象を「もの」として把え表現しようとする、一つの比喩的表現傾向のあらわれだと言える。この変化によって、外に現われた IO、すなわち OIOは、一つのまとまりのある明確な動作の表象をもつことになる。^⑨

さて、|do| の variants の第一段階である基本的動作語 v_1 は、その特徴として、方向語^⑧としての性格を持ち、具体的動作内容を表わす

OIO を然るべき位置に方向づける役割を持っている。代表的な v_1 は、have, make, give, take[Ⓢ] などである。このうち、have と take は、OIO を主語の側に方向づけ、又、make と give は、OIO を概して主語の対象の側に方向づける。

I then begged to *have an interview*. (H. Melville, *Bartleby the Scrivener*) / He *made a gesture* and laughed loudly. (E. Hemingway, *A Farewell to Arms*) / Emma *gave a start*. (J. Austen, *Emma*) / He turned his back and *took a step or two* towards his door, …… (G. Greene, *The Power and the Glory*)

これらの例文はいずれも、この構文の最も簡単な形態をなすものであって、一般には、こうした素朴な形態はむしろ少く、大抵の場合は、OIO に何らかの修飾語 (Adnominal Modifier 略して AM) が加わって一層複雑になっているのが普通である。

We *had a long talk* yesterday. (E. M. Forster, *A Room with a View*) / The one thing that *made a profound impression* on me was their sincere desire for peace. (*Time*) / But their discovery by a guiding theory has *given an enormous boost* to physics. (*Time*) / He spoke of the need to *take a fresh view of the U. S. relations with recalcitrant allies*: (*Time*)

では、こうした修飾語は、この構文ではどう役割を果たしているのだろうか。まず大切なことは、修飾されている要素が OIO である点である。形態的には「もの」の表現として表わされているが、先にも述べた通り、これは本質的には動作の表象を表わす Semanteme である。Semanteme を

修飾するということは、単一動詞で言えばその IO、すなわち、具体的動作の表象を修飾することである。つまり、動作の在り方を修飾していることになる。言い換えると、この構文の AM は、単一動詞における副詞的修飾語の役割を果しているということが出来る。この関係は、次のように形式化できる。

$$S + \underbrace{[\underline{v}] + AM - [OIO]} \longrightarrow S + \underbrace{[\underline{V}] + AM^{+LY}}_{\uparrow}$$

さて、このような特色を持つこの“S+v+OIO”構文は、機能の上から二つの大きな利点を持っている。その第一は、動作の表象である *Semanteme* が「もの」の表現の姿を借りて言語表現に現われることによって、動作の瞬間的な aspect（相）をも表わし得る表現となったことである。大部分の OIO が、不定冠詞を伴っているのも、これを裏づけるものと言える。^⑩

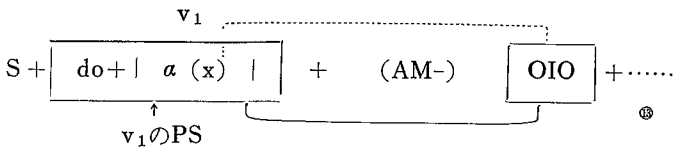
第二の利点は、この構文を用いると、動詞の副詞的修飾語を形容詞的修飾語で表現できるという利点である。これは、英語の名詞的表現傾向とそのまま合致するものであり、又、-ly のつく副詞を clumsy なものだと^⑪して極力避ける一般的傾向とも反の合うものである。又、単一動詞だと -ly を持った副詞を二重に重ねなければならない場合や、副詞の位置をどこにするかという問題にも、この構文は、ごくスムーズな解決を与えることができる。

以上、この章では、まず、従来の“S+V+O”構文に構造上二つのレベルを区別し、次いで、“S+v+OIO”構文とはどのようなものであるかについて簡単に考察してきた。しかし、|do| の variants は、基本的動作語の段階でとどまるものではない。又、修飾語と OIO との関係についても細かく調べてみる必要がある。そこで、次の章からは、広く“S+v+OIO”構文全般にわたって考察してみたい。

III. 潤色された基本的動作語

前の章では、心理構造が言語表現に現われる際には、| do | は、その variation の第一段階として、基本的動作語をとることを明らかにした。この章では、その基本的動作語が、更に具体的な動作内容を受け入れ、特殊化されることによって、様々に潤色されていく段階を考察してみたい。

さて、基本的動作語の段階では、 v_1 が単に方向語としての機能を持ち、一方、OIO が具体的な動作内容を示すというふうに、 v_1 と OIO との機能の分化がはっきりしていた。

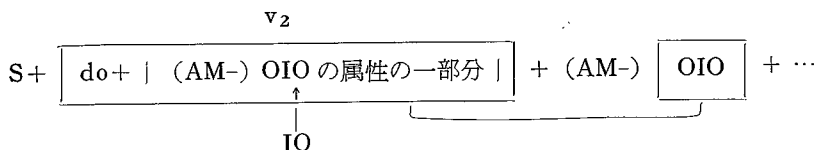


ところが、この基本的動作語も、その方向づけの在り方が具体的にどうい
うものであるかを重視して表現しようとする、当然変化を受けてくる。こ
のようにして、基本的動作語が幾分潤色されてできた v_2 の段階が生れる。

Fell Thirst and Famine *scowl* / *A baleful smile*. (T. Gray, *Bard.*) / he *heaved a heavy sigh* when he thought of encountering the terrors of Dame Van Winkle. (W. Irving, *Rip Van Winkle*) / His wife and daughter *sobbed a violent negative*. (Poutsma) / López Mateos gently prodded Johnson to *device a speedy solution*. (*Time*)

例文中、scowl, heave, sob はいづれも give の、device は make のそれぞれ variants だと考えられる。すなわち、scowl は、a baleful smile の表わし方を特殊化し、heave は、a heavy sigh が本来持っている独特の表情を示し、又、sob は、a violent negative がどういう態

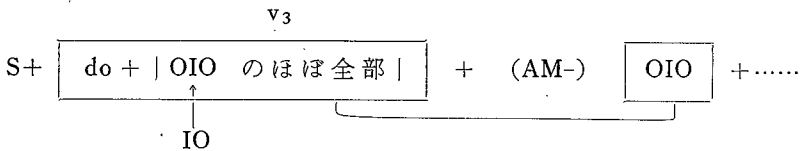
度で示されたかを具体的に説明している。このことから、(AM-) OIO が持つ表象の属性の一部分が v_1 を潤色する要素となって心理的に v_1 に作用し、その結果 v_2 を生んだと言える。つまり、この段階は、OIO が本来その伝達内容として持っている具体的動作内容が、一部分動詞側と overlap した状態だと言える。尚、動作内容が部分的にしる overlap されるということは、 v_2 と OIO とが同一動作を一部分重複して表現することであり、ここに一般に同族目的と言われる表現の原初的形態が生れるのである。この段階の関係を形式化すると次のようになる。



このように、 v_2 の段階では、動作内容の重複はまだ部分的なものである（部分的同族目的の段階）。だから、 v_2 と OIO とは、各々、方向語としての機能と具体的動作内容の伝達機能という本来の役割をまだ保っていると言える。ところが、この overlap の傾向が更に進んで次のような表現になると、この機能の分化は完全にくずれ、具体的動作内容のほとんど全部が動詞の側で表現され、その結果、動詞と OIO とに、枠構造動詞の動作内容がほぼ完全に overlap する、いわゆる同族目的の段階〔 v_3 〕^⑧が生じる。

The world's youngest monarch, Constantine will be tutored in state craft by the foxy Papandreou, 76, whose Center Union coalition won a landslide victory over Karamalis' Conservatives last month. (Time) / Those of us who see what is happening from the inside believe we will soon reap a considerable harvest from our present efforts. (Time).

初めの例の win は, have 又は get の variant と考えられるが, ただ「手に入れる」という意味ではなく, 「勝って手に入れる」という意味である. 従って victory の内容のほとんど全部が, 動詞の側と overlap していると解釈できる. reap と harvest との間にも同じことが言える. この関係を形式化すると,



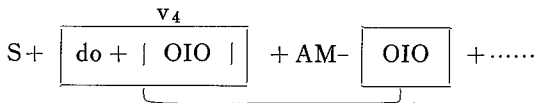
次に, 同族目的の表現から, 動詞と OIO とが同一語根から生じている表現を区別して [v₄] とすると, [v₄] では, 動作内容が完全に重複してしまう.

Soams *smiled a sneering smile.* (J. Galsworthy, *The Forsyte Saga*) / I wanted to *live a large life.* (G. Eliot, *Daniel Delonda*) / Sinuous and shimmering, dressed in green and gold, she *danced a ritual dance.* (*Time*)

尚, 次の諸例も, v₄ の段階に分類できる.

His friends were *doing their best* to make him president.
/ He *tried his hardest* to persuade them to buy. (Hosoe) ⑧

この段階を形式化すると



このように, [v₃] と [v₄] との別をつけるわけは, [v₄] では, IO と OIO との動作内容がぴったりと重複するのに対し, [v₃] では, IO と

OIO がほぼ同意義でも元来違った語根に発し、従ってそれぞれいくらか異った固有の含みを持つため意味範疇がびったりと重複しないという点があるからである。この点からも、win a victory の類の表現は普通に用いられても、smile a smile の表現は、a smile に a certain smile などの特殊な意味を持たせない限り、ほとんど用いられないわけがうかがえる。a smile に特殊な意味がなければ、単なる tautology に終わってしまうからである。^⑩

このような考察から、[v₃]、[v₄]においては、動詞部分が OIO の伝達内容をほぼ完全に、又は完全に表現し得ることから、二要素間の機能の分化は完全に破れ、その結果、OIO は [v₁]、[v₂]のものとは異質の性格を帯びてくる。すなわち、OIO は、動作の相対的数値である AM を単に期待する形式的な名詞要素の役割しか果さないようになってくる。

さて、v₁ が幾分潤色されて v₂ の段階が生れる場合を先にみたが、その場合 OIO が「絶対概念語」^⑪的の性格を帯びている際には、潤色された動詞がその IO の中に OIO をすっぽりと内含する場合が生じてくる。

One group of Western experts, pointing out that Rumania had carefully *steered a neutral course* in the Sino-Soviet feud, argued that…… (Time) / Nellie spends a hysterical hour every evening getting him into his ensemble, and… (Time) / Moreover, the British now pay preferential prices for Southern Rhodesia's staple crop of tobacco; (Time)

最初の例の steer は、take a neutral course の take が潤色されたもので、steer は、その IO の中に course という要素をすっぽりと内含していると言える。従って、この context では、course は動作の表象としての本来の役割が薄れ、単に相対的な数値を期待する絶対概念語の性

格を得ている。次の, price と hour についても同じことが言える。この段階を [v₅] として区別すると, この段階では, OIO は, 動詞の IO の中に絶対的要素として含まれているものであり, 従って, steer a course だけでは意味をなさず, 必ず OIO は AM を必要とするとと言える。この段階を形式化すると,

$$S + \boxed{\text{do} + | \text{B} + \text{OIO} |} + \text{AM-} \boxed{\text{OIO}} + \dots$$

以上, この章では, 基本的動作語が具体的動作内容を受けいれていくに従って, OIO の本来の機能が低下し, それと同時に, AM の機能の重さも変わってくる点を考察してきた。ここで, この章のまとめに入りたい。

まず, 枠構造動詞は, その本質的性質として単一動作を二つの要素からなる枠構造として表現することから, 一般の同族目的の全ての表現段階を含む。もっと正確に言えば, 同族目的の表現形式とは, ここに言う “S + v + OIO” 構文の一部分の段階に対して与えられた漠然とした名称であり, この段階を追って観察すれば, その原初的形態から完成されたものまで系統づけることができる。

第二に, この重複表現の生れる契機を考えてみると, 心理的に, 一方で一つの動作を枠構造動詞で表現しようとする欲求を持ちながら, 他方で, 動詞部分を情報上或いは修辞上特殊化して, できるだけ単一動詞で表現しようという欲求が働いているからに他ならない。言い換えると, この重複表現は, 動詞表現の二つの Speech Forms, すなわち, 枠構造動詞の表現と, 単一動詞の表現とが, 心理的に mix して言語表現に現われた現象であると解釈できる。

第三に, これらのことから, v₁ が v₅ まで変化する過程は, 枠構造動詞で表わされていた具体的動作が, 次第に動詞部分だけで表現されるよう

になって単一動詞による表現へと近づいていく過程であり、一方、それと比例して OIO は、その具体的動作伝達の機能を次第に失って、AM を期待する形式的な名詞要素の働きに変わり、相対的な数値としての AM を予期する絶対概念語の性格に近づいていく。

第四に、自動詞的、他動詞的という観点から見れば、 v_1 から v_5 への変化は、動詞の他動詞的性格から自動詞的性格への移行を意味する。すなわち、 v_1 が潤色されるにつれて動詞部分は OIO の持っている具体的動作内容を次第に吸収して、他動詞的性格から自動詞的性格へと移行し、 v_4 の段階に至って完全に OIO を吸収し尽して、何らの目的語をも必要としない動詞となる。従って、それと共に、AM-OIO は、その形式的目的語としての役割から、副詞的機能を持った副詞的対格の性格へと変化していく。

第五に、AM の必要度という観点からすれば、まず $[v_1]$ と $[v_2]$ 及び $[v_3]$ の一部においては、機能の分化から OIO の側に具体的動作内容を伝達する働きが重いので、AM が必ず必要ということはない。しかし、context に応じて AM に重い情報的役割を与えることもできる。これに対して、 $[v_3]$ の一部、 $[v_4]$ 、の段階では、一般に AM が必要である。それは、OIO が既に動作内容伝達という機能をほとんど失ったがために、AM との結合という点に唯一の存在理由を見い出していることから明らかである。この傾向は $[v_5]$ に著しい。この段階では、AM のために OIO が動詞部分から引き出された感さえる。このように、この“S+v+OIO”構文においては、($[v_1]$ 、 $[v_2]$ 、 $[v_3]$ の一部、では不要の場合もあるが)一般に、AM を予期する体制を整えていて、多くの場合 AM が不可欠の役割を果していると言える。

IV. OIO とその Adnominal Modifier との関係

前の章では、動詞と OIO との関係に焦点をあてて考察してきたが、こ

の章では、動詞との関係を含めて、OIO とその AM との関係を考察してみたい。

まず、ここで言う Adnominal Modifier (AM) を規定しておく必要がある。ここで言う AM には、大別して二つの異った要素がある。第一の要素は、OIO を限定的に修飾する形容詞である。これは、この構文では最も典型的な修飾表現であるが、これと同等の機能を果たすと思われる次の第二例、第三例の如き表現も、同一要素として一括する。

He gave me a *long, haggard* look. (W. S. Maugham, *The Book-Bag*)

She gave him a look of *hatred*. (Id., *The Back of Beyond*)

He gave her a look *that had in it something pleased and humorously affectionate*, as though…… (Id., *The Book-Bag*)

第二の要素は、OIO の具体的内容を説明する要素で、多くは同格の of や接続詞の that で導かれる。この要素は、OIO の External Object と解されないことはないが、厳密には、OIO の在り方を修飾する副詞的な役割を持つものである。¹⁸⁾

I had a feeling *that she was listening to me*. (W. S. Maugham, *The Book-Bag*)

He gave an impression of *unstable hilarity*, as if…… (G. Greene, *The Power and the Glory*)

I remember having a silly idea *he might come to the hospital where I was*. (E. Hemingway, *A Farewell to Arms*)

以上の二要素を Adnominal Modifier として規定し、AM として略記する。ただし、これらの要素と形態的にまぎらわしい、OIO の External Object は、はっきり区別されねばならない。

以上の規定を前置きにして、次に、この AM と OIO とは、機能の上でどんな関係にあるかを、総合的に考察してみたい。

一般的に言って、名詞要素に形容詞的修飾語がつくということの意味は、その形容詞的修飾語が表わしている属性を一相対的数値とする絶対概念の幅が、その名詞要素に与えられたということである。言い換えると、その形容詞的修飾語を一数値とする測度性 measurability の幅が、その名詞要素に与えられたことを意味する。例えば、a soft voice という時、voice に与えられた measurable な絶対概念の幅は、「柔かさ、硬さ」ということであり、それに相対的数値を与えると soft だというのである。

さて、この相対的数値と measurability の考え方を、AM と OIO との関係に適用すると、OIO に AM がつくということは、OIO の表わす具体的動作に AM の属性が属する絶対的概念の幅が与えられたことであり、その結果、AM がその数値として働いていることを意味する。すなわち、AM は OIO に measurability の幅を与え、自らその具体的動作を決定する数値となって働き、この枠構造動詞表現を最終的に完成さす役割を果している。

ここで事例の検討に入ろう。まず、AM がない段階、従って OIO の measurability の幅も 0 である (OIO_0)。この段階では、動作の名詞的表現か瞬間的な表現に主なねらいがある。当然この段階には、 $[v_1]$ 、 $[v_2]$ 、 $[v_3]$ の一部分、しか含まれない。

$[v_1]$ At this speech Miss Amelia only *made a smile* and

a blush. (W.M. Thackeray, *Vanity Fair*)

[v₂] Marius Lyndwood *laughed an answer.* (Poutsma)

[v₃] He had *won a victory* over them, (E.M. Forster, *A Room with a View*)

次いで、AM がつく場合だが、まず、AM をはずして読んでも文全体の意味が通じる段階がある。この段階の AM の性質は、OIO の典型的属性と tautological なものである場合が多く、従って、具体的な動作の在り方まで数値化できないために、AM がなくても文意が通じるわけである。この段階には、[v₁]、[v₂]、[v₃] の一部、が相当する。

[v₁] Palomar's men decided to *make a closer examination.* (*Time*)

[v₂] He called his son on the phone one morning and *tried a jolly joke.* (*Time*)

[v₃] Curiosity and timidity *fought a long battle* in his heart. (Hosoe)

この段階 (OIO₁) では、まだ measurability の幅は広くはないが、段階が変わって、次の如き表現になると、OIO の measurability の幅がぐっと広がっていることが分る。

[v₁] He had a *strangely puzzled look.* (W.S. Maugham, *The Back of Beyond*) / You *make a most unfair and incorrect reference* to us in your Feb. 21 story on Beverly Hills. (*Time*)

[v₂] Polish Director Roman Polanski *maintains a suspenseful pace, putting……*(*Time*) / In Washington the word is out that the companies must *display a more venturesome attitude before……* (*Time*)

- [v₃] Death *Grinned horrible a ghastly smile*. (Hosoe)
 [v₄] I sometimes *dream melancholy dreams*. (Poutsma)
 [v₅] 'What is your answer, Bartleby?' said I, after
waiting a considerable time for a reply. ……
 (H. Melville, *Bartleby the Scrivener*)

ためしに、これらの表現から AM を抜き取って読んでみると、それぞれの文章の肝心の要点がピンとこないことが分る。つまり、その程度にまで、これらの文章では、OIO の本来の伝達機能がほやけてきている、言い換えると、OIO の measurability の幅が広がってきて、絶対概念語の性格に近づいていると言える。この段階を OIO の測度性の幅が2の段階 (OIO₂) とすると、AM の機能は、この段階において最大となり、その結果、AM が文全体の伝達内容を最終的に決定するということになる。

ここで、この章のまとめに入ろう。

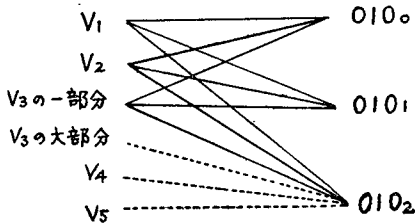
まず、第一に、この構文における AM の機能の重さは、およそ三つの段階に分けることができる。まず、AM のない段階 OIO₀、次いで AM がなくても文意の通じる段階 OIO₁、更に、AM が必要な段階 OIO₂ である。勿論、この種の分類にありがちなように、お互いの間に厳密な *borderline* を引くことは不可能である。

第二に、OIO の測度性の幅の広さは、そのまま AM の機能の重さに比例するものである。すなわち、AM の機能が重くなると、OIO 本来の機能は薄れて絶対概念語の性格へと近づき、測度性の幅を次第に拡大する。この関係を逆に言うと、AM の機能の増大は、OIO 本来の機能の低下に比例する (増大に負の関係で比例する) と言える。

第三に、動詞側との関連においてこの AM の機能を考えると、まず、[v₁]、[v₂]、[v₃] の一部分、の段階では、OIO が本来の機能を保っているために AM が必ずしも必要ということはなく、各々の機能の重

さは、context における二要素の比重関係によって決まる。従って、これらの段階では、各々 OIO_0 , OIO_1 , OIO_2 の三つの段階があり得ると言える。次いで $[v_3]$ の大部分と $[v_4]$, $[v_5]$ では、動詞の側に OIO の本来の伝達内容がほぼ完全に、又は完全に移行しているために、 OIO は新たに動作の相対的数値を期待する形式的名詞要素に変化し、その結果、これらの段階では、 AM を必ず必要とし、常に OIO_2 の段階である。

第四に、以上のことから、この“ $S+v+OIO$ ”構文は、理論上、12の機能的に分類されたタイプを持つと言える。すなわち、動詞側は、 v_1 から v_5 までの variants をとって変化するが、他方、それに対応して OIO も三つの段階に変化する。しかし、variants の各々がこの三つの段階をとるのではなく、既に明らかな通り、 $[V_1]$, $[V_2]$, $[V_3]$ の一部、では各々 OIO_0 から OIO_2 まで、 $[V_3]$ の一部、 $[V_4]$, $[V_5]$ では、 OIO_2 の段階のみが対応する。当然のことながら、これはあくまでも典型的なタイプのモデル的な組合せであって、実際の表現では、いつれのタイプにも当嵌めがたい中間的なものがあり得ることはいうまでもない。



第五に、この構文における AM の機能は、文章全体の伝達内容を最終的に決定することである。すなわち、 AM が不可欠の段階があることは、少なくともその段階においては、 AM は、文章全体の内容を支配する力を持っていると言える。次の文章は、 OIO_2 の段階のものであるが、この文章の $AM (=x)$ が hateful であるか sweet であるかによって、文全体の内容が全く逆のものになることから、このことは明らかである。

When I saw her, she gave me a (x) look.

尚, OIO_1 の段階についても, 程度こそ違うが, 同じことが言える.

第六に, 以上の考察から, この “S+v+OIO” 構文の構造を形式化すると次のようになる.

$$S + \boxed{v_n} + (AM-) \boxed{OIO_m} + \dots$$

$$\left[\begin{array}{l} n : 1, 2, 3. \rightarrow m : 0, 1, 2. \\ n : 3, 4, 5. \rightarrow m : 2. \end{array} \right]$$

すなわち, この構造の意味するところは, 一つの動作を, 一般の「もの」の相関関係に似せて, 動詞 (v) と名詞 (OIO) の二つの要素からなる Frame-work として表現して枠構造動詞を形成し, その表現内容を最終的に決定する要素, すなわち修飾語 (AM) を, 必要とあらばいつでも受け入れる体制を整えているということである.

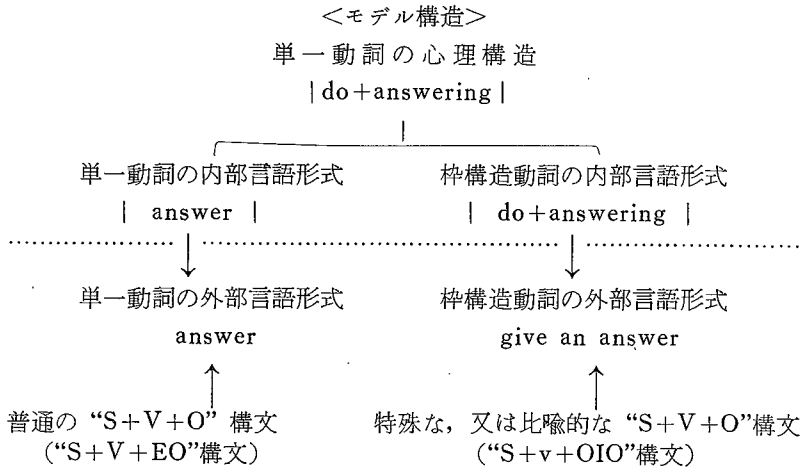
結 論

私が, 小論で述べたかったことは, およそ次の5つの点に要約される.

まず第一は, いわゆる “S+V+O” 構文には, 意味・機能の上から二つの異なった表現レベルがあることである. その一つは, 一般の「もの」の相関関係を表現したレベルで, 動詞形態は, 単一動詞かグループ動詞の形態を採る. 他の一つは, 具体的動作内容を「もの」に見たて, 一般の「もの」の相関関係と同じように扱った表現レベルで, 厳密には枠構造動詞の一部であるものを相関関係の Terminus であるかのように表現した, 言

わば比喩的な“S+V+O”構文或いは特殊な“S+V+O”構文と呼ぶべきレベルである。前者の普通のレベルの表現を“S+V+EO”構文、後者の特殊な或いは比喩的な表現レベルを“S+v+OIO”構文と呼ぶことにする。

第二に、単一動詞と枠構造動詞との両方の構造に共通するモデル構造として、単一動詞の心理構造を便宜上設定する。この結果、枠構造動詞の原初的形態は、単一動詞の心理構造に求めることができる。



第三に、枠構造動詞は一つの動作を動詞部分と名詞部分との二つの要素で表現するために、修辭的表現段階である〔v₂〕以上では、同一動作内容をこれら二要素に重複して表現するという現象が起る。これが、いわゆる同族目的の表現である。だから、言い方を換えると、同族目的の表現とは、この枠構造動詞表現の一部分の段階に対して与えられた便宜上の名称にすぎない。尚、この重複表現の生れる契機は、単一動詞表現と枠構造動詞表現とが mix した言語心理にあると言える。

第四に、この特殊な“S+V+O”構文は、その中心的構成要素として、

v, AM, OIO という三つの要素を持っている。この三つの要素は、context 或いは修辞上、情報上などの理由から、機能の上でお互いに影響を及ぼし合いながら一定の関係を保って変化する変数 Variables だと言える。その原則的關係は、 v_1 が OIO のもつ具体的動作内容を次第に吸収して v_5 まで変化するにつれて、OIO 本来の機能は次第に失われ、その結果、AM を単に受けとめるだけの形式的名詞要素へと変化していく。一方、これと共に、AM は次第にその機能の重さを増して、 $[v_3]$ 以上ではほぼ必須の要素となる。この AM と OIO との関係を、それだけに限って観察してみると、OIO に AM がつくということは、OIO に AM を一相対的数値とする絶対的概念の幅、つまり measurable な概念の幅が与えられたことであり、従って、AM の機能が重くなるということは、OIO の measurability の幅がそれだけ広まって、絶対概念語的性格をそれだけ強めたことを意味し、その結果、OIO 本来の機能をそれだけ弱めたことになる。

第五に、OIO を修飾する AM は、OIO が動作表現の一部分であるところから、この構文の副詞的修飾語として機能する。しかも、この構文自体が動作表現である上に、この構文の最も重要な具体的動作内容を修飾しているところから、AM は、文章全体の内容を最終的に決定づける力を持つ。従って、AM は、この構文の最も重要な機能を果していると言える。

以上が小論のまとめであるが、ここで最初に示した二つの文章の違いの問題に戻ろう。

We had a good time on the hill. —(1)

We had a good house on the hill. —(2)

まず、(1)の文章は、これまで述べてきた“S+v+OIO”構文であって、have と time とが spend の意味の枠構造動詞を形成している。そして、time は、一定の幅を持った特定の「時」という絶対絶念語として働き、その相対的数値として good という AM を受けいれている。言うまでもなく、good がなければこの表現は意味をなさないために、OIO₂ の段階であり、その支配的な役割は、この語を bitter で言い換える時、容易に証明される。従って、(1)の文章は、S+v₁+AM-OIO₂ をその骨格構造とする。

次いで、(2)の文章では、have と house では枠構造はなし得ず、従って a good house は、have の IO に含まれる目的語のクラスから、選択され特殊化された External Object であると言える。従って、(2)の文章は、S+V+EO の骨格構造をもつ。

註

- ① 絶対値符号||に入れられた要素は、心理構造における要素を意味する。
- ② 自動詞、他動詞という呼び方をしない理由は、まず、英語の動詞の大半は、自他いづれの表現角度からも扱えられ得る動作に対して名付けられたものであり、その結果、自他の区別は単に表現角度の差異にすぎない場合が多いということ。第二に、“S+v+OIO”構文においては、自、他の区別は適用しがたいということなどである。(細江逸記著「精説英文法汎論(第5版)」第5章、44. 参照)
- ③ Mod. E. では、Direct Object は全て Accusative Object と考えられる。(英文法シリーズ:「格と人称」, P. 82) が、ME 以前に与格・属格又はそれに類似するものであって、今では Accusative Object と区別がつかないもの(細江博士の上記著書 43. (3)に分類されるもの)は、小論ではできる限り Direct Object から排除する。
- ④ Smith College の Murray Kiteley などの用いている *Internal Accusative* は、外部言語形式の段階のものであって、小論では、特殊な“S+V+O”構文の OIO に相当するものである。(M. Kiteley, *The Grammars of 'Believe'—The Journal of Philosophy*, 1964., P. 257) 又、ドイツ語の文法でいう *Inners*

Objekt は, Einen herrlichen Traum habe ich geträumt. などの同族目的表現についてのみにったものである。

- ⑤ 単一動詞+名詞で一つの動作概念を形成する場合は, 名詞が修飾語を受け入れることができるので枠構造と考え, 「枠構造動詞」(Frame Form Verb)と呼ぶ。e.g. *give a sweet smile*. これに対して, 単一動詞が副詞や前置詞と結合して新しい動作概念を作る場合は, 「グループ動詞」(Group Form Verb)として区別する。
- ⑥ *Deutschbein* は, この種の動詞を「補助動詞」と呼んでいる(英語学ライブラリー 24, 「名詞構文と英語」, P. 38)。又, Poutsma は, 漠然とした意味を持つ動詞(a verb with a vague meaning)だとして, 'a connective' という呼び方をしている。尚, 心理構造の |do| は, 実際の言語表現に現われる場合は, さまざまな variants をとる。v₁ はその第一段階の意。
- ⑦ Cf. H. Poutsma, *A Grammar of Late Modern English*, Part II, Section II, Chapter XII, 20., P. 27); O.E.D., s. v. -ing, I. a.
- ⑧ 英語学ライブラリー 19, 「シンタクスの原理と根本問題」, P. 64. 参照。
- ⑨ do は v₁ より一つ上の原初的段階として区別する。
- ⑩ Cf. O.E.D., s.v. -ing, I. a.
- ⑪ 英語学ライブラリー 24, 「名詞構文と英語」, VII, XII. 及び H. Poutsma, *op. cit.*, Chapter LIV, 9. (d) ., P. 396. を参照。
- ⑫ 例えば, He thinks entirely progressively. これを "S+v+OIO" 構文で表現すると, He has an entirely progressive thought. とも言える。
- ⑬ αは方向を示す基本的動作のこと。()は必ずしもいつも現われるとは限らないことを意味する。この構文は動作表現の構文であるので Specified x は, 比喩的な「もの」の表現, すなわち, OIO である。[v₂]以下では省略する。
- ⑭ v₃ は, v₃ の段階の variant (動詞)だけを示すが, [v₃]は v₃ を含む段階全体を意味する。
- ⑮ 例えば, あとの例は, He tried his hardest *trial* to persuade them to buy. の省略形と考えられ得る。
- ⑯ Lord Angelo Dukes *it* well. —Measure for M., III. ii. 100. の *it* は, この重複表現を避けるために用いられたとも解される。この *it* を L. Kellner (*Historical Outlines of English Syntax*, § 283., P. 176) や細江博士(「精説英文法汎論」第 5 章 44.) その他の学者などは, 一種の同族目的と解しているが, Jespersen (M. E. G. VI. § 6. 87, VII. § 4. 610) は "Empty Object" 或いは Unspecified 'it' と呼んでいる。筆者の考え方からすれば, この種の表現は, 少くとも臨時動詞として用いられたものは, 同族目的と解したい。すなわち, do Duke, do a walk, などは枠構造動詞と見なし得るので, Duke や walk は OIO と解し得る。今, この OIO が, 動詞部分で特殊化される場合を考えると, Duke Duke, walk a walk という tautological な表現が心理的に考えられ得る。この場合, 重複される OIO の Duke は, すでに動詞部分の Duke によって, その具体的動作内容を表現されているため,

いわば不要である。そこで OIO は代名詞で表現されて *Duke it, walk it* という表現が生れると考えられるのである。

- ⑰ 「色, 大きさ, 重さ」などの類の概念を表わす語のこと。これに対して「赤, 白, 黄」などは, 「色」に対する相対的概念である。
- ⑱ 例えば, *I had a feeling that she was listening to me.* では, *she-is-listening-to-me*^{+ishly} のように *had a feeling* するのであって, イタリアック体の部分は動詞の対象物ではない。 *had a feeling* の対象物は “her” と考えるべきである。(cf. M. Kiterey, *op. cit.*, P. 258.)
- ⑲ 次の2例はいづれも他動詞の例である。この場合は, *do it* の *it* は当然 Specified x を含んでいる。例えば, 最初の例の *it* は, *killling himself* を指している。

‘What did he want to *kill himself* for?’
 ‘How should I know?’ ‘How did he *do it*?’
 ‘He hung himself with a rope.’ (E. Hemingway, *A Clean Well-lighted Paloce*)/
 ‘Thanks all the same. I won’t bother you.
 I’ll *hop down the road.*’ ‘No, no.’ she said.
 ‘Oh! no. Don’t *do that.* It’s a long way.
 Don’t *do that.*’ (H. E. Bates, *Night Run to the West*)

尚, この小論は1967年大阪大学に提出した修士論文を圧縮したものである。又, 日本英文学会第39回大会に行った同題目の研究発表は, この小論を発展させたものである。